



草庵

中国に残る
マニ教寺院

かつて、西はスペインや北アフリカ、東はインドや中国にまで広まったマニ教だったが、その後、衰退して15世紀までに消滅したと言われていた。ところが、中国には滅んだはずのマニ教のお寺が現存するという。

吉田一郎「文・写真」



廃れてしまった世界的な宗教の代表格と言えば、やはりマニ教だろう。マニ教は3世紀にペルシャでマニが始めたとき、ゾロアスター教やユダヤ教、キリスト教、仏教などの要素を取り入れたと言われる。世界では光の王国(善)と闇の王国(悪)の戦いが続いており、現在は闇の勢力が支配していて、人間の肉体も闇によって構成されているが、肉

体には「光の破片」も残されており、智慧によってその光を自覚し、厳しい戒律を守ることによって太陽へ戻すための修行を続け、来たるべき光と闇との最終戦争に備えるべし———というのがその教えである。

一時は、西はスペインや北アフリカ、東はインドや中国にまで広まったマニ教だったが、その後、衰退して15世紀までに消滅したと言われていた。ところが、中国には滅んだはずのマニ教のお寺が現存するというのだ。

マニ教の寺へ

マニ教の寺があるのは、福建省泉州郊外の晋江。泉州といえば、唐の時代から対外貿易港として栄え、イスラム教やキリスト教も盛んだったところ。

マニ教はシルクロードを通じてウイグルから中国へ伝わった。唐の都・長安には大雲光明寺という寺院が建てられたが、会昌の廃仏(西暦845年)で仏教やキリスト教とともに外来宗教として弾圧され、都から離れた福建や浙江に拠点を移す。

この寺院は「草庵」と言い、北宋初期の10世紀末に建立された。当初は龕



上左：長髪で顎ひげ姿が特徴的な摩尼光仏
上右：マニ教を弾圧した明の知県もなぜか一緒に祭られている
下左：丘の上にそびえ立つ草庵。下界と隔絶した環境が独自の信仰を守った
下右：16文字で刻まれたマニ教の真言。今も村の人々に魔よけの呪文として唱えられている

苴き屋根の寺だったので草庵と命名されたそうだが、元の時代に石造りの建物になった。その後、何回か改築された現在の建物は1930年代に完成したものだ。

境内には明の時代に住職だった明書が、「清浄光明大智慧無上至真摩尼光仏」というマニ教の神髄を刻んだ石がある。マニ教なのになぜ「仏」なのか。マニ教は世界各地での布教にあたり、各地で信仰される神の名や神話、哲学用語などを取り入れた。中国へ伝来した時も、経典を漢文に翻訳する際に、先に伝わっていた仏教から、「仏」「法身」「解脱」「涅槃」などの用語を大量に借用した。

マニ教は南宋や明の時代に「魔教」と呼ばれて弾圧され、「明教」と名を変えて中国化を図り、仏教や道教を装って弾圧をかかわそうとしてきた。そんな状態が何百年も続くうちに、草庵の僧侶ですら「ホントは仏教ではなく、マニ教なのだ」という自覚を失い、「釈迦牟尼が訛って摩尼になっただけ」などと解釈され、「ちよつと変わった仏教寺院」だと認識されてしまったようだ。

銭榿の弾圧

本堂の入口に石像があった。もしかするとマニの石像かと思っただが、銭榿という明の時代の役人だった。銭榿は1529年から2年間、晋江県の知県(県知事)として水利工事や教育の振興、仏塔の建立などを行うなど、清廉で慈悲深い善政を敷いたと言われる。また、儒教に熱心で、怪しげな神を祭り人心をたぶらかす「邪教」の取り締まりにも辣腕を振るつた。

当然マニ教も弾圧の対象とされ、草庵の僧侶たちは追い出された。龍泉書院という学校に変えられた。後に草庵は再びお寺に戻るが、その間にマニ教の

経典や法器などは散逸してしまう。17世紀前半に書かれた閩書（地方史誌）には、草庵のマニ教について「今その術を習う者は、呪術などを行つてゐるが、その教えは甚だチンペンカンペンである」と記されている。

こうして草庵は復興できたものの、本来のマニ教の教えは継承できず、仏教や道教へ溶け込んでしまった。つまり錢梗は、世界最後のマニ教の拠点にとどめを刺した人物とも言えそうだが、龍泉書院は短期間に科挙合格者を18人出すという実績を上げたため、「学校を建てた偉い人」ということで、地元の人たちから「錢大爺」と讃えられている。

証拠品の出土

1979年に境内で「明教会」と書かれた茶碗が大量に出土した。茶碗は12世紀初めかそれ以前に作られたもので、当時はマニ教の法事などで多くの人が集まっていたと考えられる。この茶碗により、ここがマニ教のお寺だったことが確認され、91年にはユネスコの調査団により「摩尼光仏はマニである」とお墨付きを与えられた。

一方で「霊相」は、敦煌で発見されたマニ教経典によると、「妙形特絶」つまり、特に美しい姿をしている神で、光の王国の神が闇の悪魔から光の元素を取り戻すためにミフルヤズドの次に遣わしたということだが、唐のマニ教経典には載っておらず、明教では「夷数（イイエス）」ということになっている。人類の靈魂を救うためにやって来た神で文人の姿をしているようだ。本来ならマニは、神が遣わした預言者に過ぎず、明使や霊相よりも格下のはずだが、「実態のよくわからない神様よりも、具体的な教祖様の方が拝みやすい」ということで、おマニ様が中央と言うことになったようだ。

さらに、なんとマニは老子の化身だという伝説もある。つまり老子が500年かけて西へ旅に出て、インドでブツダとなり説いた教えが仏教で、さらにソグド国でグアバの実に魂を込めたところ、その身を食べた王妃が妊娠して、胸を破って生まれた子供がマニになったというのだ。マニ教の神々の左には十八真人、右には境主公という道教の神様が祭られ、さらに別枠で観音菩薩と福德正神が祭られている。つまり仏教・道教・マニ

草庵のおみくじは、中国の他のお寺や廟のおみくじと似たり寄つたりだが、おみくじに書かれた漢詩にはマニ教の神々や教えを含んだ詩がいくつもあることから、また「うちはマニ教の寺だ」と自覚のあつた明朝末期ごろに作られたものと推測される。

草庵には入れ替わり立ち替わり地元



界唯一のマニ教の寺院」と言うので、つぎ遺跡みたいなものだろうと思つていたが、バリバリ現役のお寺だった。

マニ教徒の村を訪ねて

草庵で新たな情報を入手した。「数年前に近くの蘇内村で、摩尼光仏」お

左：村の女性たちがお供え物を持って祈りにやって来た
上右：文化大革命では危ういところで破壊を逃れた摩尼光仏。現在はガラスで保護されている
下右：草庵がマニ教の寺院であることを証明した茶碗



上：教祖マニの両脇にはマニ教の文武の神々が
下左：マニが祭られていることが「発見」された境主宮
下右：滅んだはずのマニ教の信仰が今日も息づく蘇内村

教の神々が仲良く並んで村を守つてくれているというわけだ。「神も人も安泰なら、村中安泰」と、縁起の良いスローガンが貼つてあつた。

隠れマニ教徒

境主宮では明使の誕生日である3月23日に祭りを行う。マニ教の戒律では

マニ様を祭つた廟が発見された」と言うのだ。村は草庵がある山の麓にある。おマニ様を祭っているのは境主宮という廟だ。中国の都市には街の守り神を祭る城隍廟というのがあるが、この地方の村で村の守り神を祭っているのが境主宮である。村の守り神にしては、道から外れた奥にあり、他の廟と比べてみずぼらしい感じだ。

中央の摩尼光仏（ここでは摩尼仏）の左右に4人、さらに別枠で二人と、計7人の神様が祭られている。中央の3人がマニ教の神様で、左側は中国古代の武将、右側は文人の格好をしていて、すっかり中華風のスタイルだ。村の人々は、摩尼光仏を「摩尼公」と親しうに呼んでいる。

「明使」は唐時代のマニ教経典によれば、「明父」「大明尊」と呼ばれる光の王国の神（ズルワーン）によつて遣わされ、闇の王国と戦い、世界を創造した神（ミフルヤズド）だ。だから武將の姿をしているのだ。後に宋の時代の明教では、「神号曰明使（神の名は明使）」と、最高神の扱いになっている。村に祭られる課程で、西の方（大秦＝ローマ帝国）から来た神様らしいということ、で、「秦」の字が加わつたようだ。

けなのに、境主宮には3人祭られているのはなぜなのか。かつて草庵の他に、明使を祭る寺院と霊相を祭る寺院も存在していたが、明の時代に閉鎖させられ、学校に変えられた草庵とともに、村人たちが神様を村の境主宮に移して合祀したからだそう。

他にも、この村には摩尼光仏の真言が伝承されている。草庵の石に刻まれた「清浄光明大力智慧無上至真摩尼光仏」という文字を唱えながら手で印を結び、「全身が赤い光に包まれて邪気が祓われる」という明教以来の呪術が伝わる。2005年に調査にやって来たイギリスやオーストラリアの調査団が「21世紀に現存するマニ教信仰」だとお墨付きを与えている。

数百年にわたつて邪教扱いされ、近年では文化大革命で神を拝むこと自体が「迷信だ」と批判されても、村人たちは他所者には伏せながらマニ教由来の信仰を、マニの本来の教えはとつくにチンペンカンペンとなりながらも続けてきた。いわば隠れキリシタンならぬ隠れマニ教徒だろうか。境主宮の「発見」が契機となつて、他にもおマニ様が祭られる村が次々と見つかつていく